

龍谷の森の植物相

横田 岳人

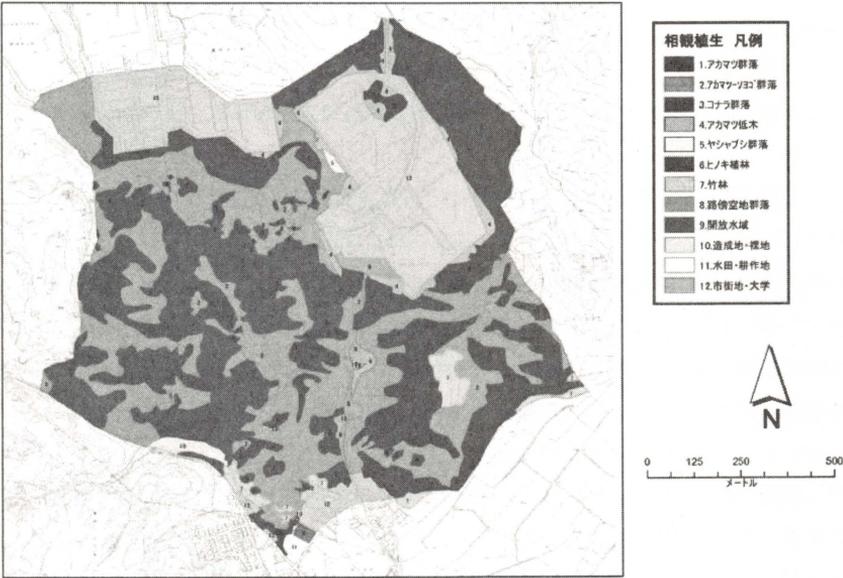
今年（2008年）は龍谷大学瀬田学舎開設20周年にあたる。1989年に瀬田丘陵の一角に、文教施設として龍谷大学が誘致され瀬田キャンパスが造成された。バブル期の地域開発の激しい時分ではあったが、大学の周囲には森林も残され、特に龍谷大学の所有する土地の森林は「龍谷の森」と通称され、理工学部や里山学・地域環境学ORCを中心とした研究教育活動の場として、地域住民の環境教育や里山保全活動などの場として用いられている。

「龍谷の森」は昭和30年頃までは里山として利用された森林であったが、龍谷大学の購入当時は里山としての利用を終え、放置された状態にあった。1974年調査の大津市の植生図や1983年調査の環境省の植生図からは、アカマツ—モチツツジ群集にスギ植林地が混じる植生であった。林内各所に砂防堰堤が設けられ、この「龍谷の森」一体が土砂流出防備保安林に指定されていることから、かつては土壌が貧弱で、降雨により土壌が簡単に流出してしまうような林冠・林床被覆であったと考えられる。植生の面からも里山として頻繁に利用されていたことがわかる。その後、ほとんど利用されることが無く放置された結果、森林の様相も大きく変化している。2004年に空中写真解析を現地踏査で補い相観植生図を描いたが、アカマツ—ソヨゴ群落のように常緑広葉樹が目立つ植分が増加し、またコナラ群落が発達しコナラの林冠が森林を覆うようになった。林冠を構成するコナラは50年ほど前に芽生えたものであり、里山としての利用が行われなくなった頃と一致する。遷移がかなり進んできたことが明らかである。

1995年に龍谷大学がアセスメント調査を行っており、植物は維管束植物374種が記録されている。理工学部横田研究室では2006-07年に標本採取を通じて「龍谷の森」の植物リスト作成を行ったが、現在までに標本採集された維管束植物は210種で、写真

等による確認を含めて279種あった。1995年に確認され2007年に確認できなかった種は160種にのぼる。これらの大部分は草本植物で、1995年確認種の55%が2007年には確認されていない。1995年の調査は標本の記録が残っていないことや調査範囲が完全に一致しないなど単純比較は出来ないが、草本植物の減少が著しいことは明らかである。これは植生遷移だけでなく、里山利用の中で生じていたモザイク的土地利用が失われ、放置という画一的管理によって、植生が均質化したためと考えている。

現在「龍谷の森」では里山保全活動を通じて従来の里山利用を還元したり、新たな里山利用の道を探っている。この過程で、モザイク的土地利用が進めば、植生の多様化が回復することが期待され、今後の推移を見守ろうと考えている。



相観植生図 (カラーページp.24参照)